

秋田・弘田柵跡 ほったのさく

- 1 所在地 秋田県仙北郡仙北町弘田・千畑町本堂城回
- 2 調査期間 一 一九九七年(平9) 五月～八月
二 一九九七年六月～一〇月

- 3 発掘機関 秋田県教育庁弘田柵跡調査事務所

- 4 調査担当者 児玉 準

- 5 遺跡の種類 城柵官衙跡

- 6 遺跡の年代 九世紀～一〇世紀後半

- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(六 郷)

弘田柵跡は、雄物川の中流域に近く、大曲市の東方約6km、横手盆地北側の仙北平野中央部に位置し、真山・長森の低丘陵を中心として、北側の矢嶋川(烏川)と南側の丸子川によって挟まれた、標高三三～三七mの低地に立地する。一九三〇年、文部省が調査し、翌年国指定史跡となり、一九七四年以降

は継続的調査が行なわれている。

遺跡は長森・真山を囲む外柵部分と、長森を囲む外郭線部分からなる。外柵は東西一三七〇m、南北七八〇mの長楕円形で、延長三六〇〇m、これによって囲まれる遺跡の総面積は約八七万五〇〇㎡である。一時期の造営で、材木堀(角材列)が一行に並び、東西南北に八脚門が開く。

外郭は東西七六五m、南北三二〇mの長楕円形で、延長約一七六〇m、面積一六万三〇〇〇㎡、石塁、築地堀と地上高三・六mの材木堀が連なり、東西南北に八脚門が開く。四期にわたる変遷がある。外郭中央部には政庁があり、五期の変遷が認められる。

弘田柵の古代における呼称については、雄勝城説と河辺府説がある。さらに、雄勝城説にも、天平宝字年間創建のものとする説と、九世紀初頭にそれが移転したものとする第二次雄勝城説とがある。

一 第一一一次調査

第一一一次調査は外郭北門の再調査である。調査事務所が初めて調査を実施した第二次調査によって、この門は新旧二時期あることが知られていた。その後、外郭東・西・南門や材木堀に四時期あり、外郭線全体に四時期の造営があることが判明し、北門の造営回数に疑問が生じたので、再確認のための調査を実施したのである。調査では、門の西半部を対象として、保存状態の良好な柱掘形二カ所を選び、重複状況を検討した結果、外郭線の他の門と同様に、四時期

の造営があることが確かめられた。

木簡は墨書のある建築部材の廃材で、北門の北側の西から二番めの位置にある、B期の柱の切り取り後の埋め土から出土した。この廃材は長さ一八〇cmで先端を尖らせてあり、材の側面中央部の一二cmの範囲を手斧で削り取り、その中に木目と直角の方向に四文字が墨書されている。三文字めの「方」の字で材の縁辺に達したため、「八」の字は「方」の左に並べて書かれている。

木簡以外の文字資料としては、「一少隊御前下」の墨書のある須恵器杯、「北預」の墨書のある土師器杯がある。墨書土器「北預」は、北門預のことを意味すると考えられ、恐らくは北門造営にあたり、その長官の下に置かれた職、または北門造営担当者のいずれかを指すものであろう。

二 第一一二次調査

第一一二次調査は、外郭北門の正面から北西部にかけての実態を探索することを目的として実施した。第一一二次調査区の北から北西に隣接する地域である。前年の第一〇七次調査の成果も合わせ、外郭北門を中心とする東西両側の区画施設のあり方が明らかになった。

木簡は、外郭北門の北西にある、全七期にわたる槽状建物の、創建段階に伴う溝SX一〇六から三点、材木堀の北に直線的に掘られた溝SD一一四五内から四点、計七点が出土した。

SX一二〇六は、最も古いSB一二〇三槽状建物を構築する前に、

その東側と南側に掘った逆し字形

の溝で、第一〇七次調査で三七点の木簡が出土したSX一一九二と北門を挟んで対称の位置関係にある。(下図参照) 溝の東西方向部分は、少なくとも約一二mの長さは、

幅約二・八m、深さ四〇cm、南北方向部分は、長さ六・八m、幅約二・五m、深さ四〇cmを測る。

木簡は、横槌・楔・曲物・箸などの木製品、広葉樹の幹、スギ材加工時に生じた木片などとともに、

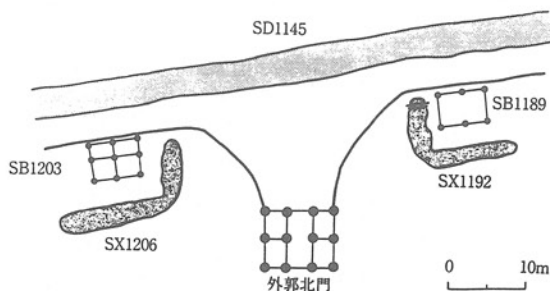
溝の最下層から出土した。木簡と

ほぼ伴出した須恵器杯に、「官」

「口」の墨書がある。

SD一一四五は、上面幅三・五×四・三m、深さ約六〇cmで、木簡は、土師器・須恵器、横槌・木錘・楔・絵馬などの木製品とともに溝底から出土した。木簡よりも上層から、「磨」の墨書のある須恵器杯、「厨」の墨書のある土師器杯が出土した。

なお、遺構外から出土した墨書土器には、「北門」「吉」「厨」がある。



弘田柵外郭北門付近遺構配置図

(60) × (10) × 3 081 第八九号

北門地区の調査において、二(4)に「北門所」、墨書土器に「北預」

記されていたことは、外郭北門が、当ても「北門」と称されている

たことを裏付ける資料である。「造北門所」が設置され、「預」職が

(1800) × (173) × (75) 061

「**「日本」の「日本」**」

不請而至の、夏休の第一の一請至品として、

(213) × 27 × 4 065 第八二号

207×12×13 065 第八四号

091 第八五号

「木」の「木」として扱っている。この「木」は、
木匠の「木」として扱っている。

温日貴亦の墨書上巻「し家」をばさふ、「比家」をあらう

(102)×(11)×2 081 第八六号

同公大夫

(327) × (14) × 5 081 第八七号

第二〇次と第二二次調査概要―（一九九八年）

(145) × 25 × 5 081 第八八号

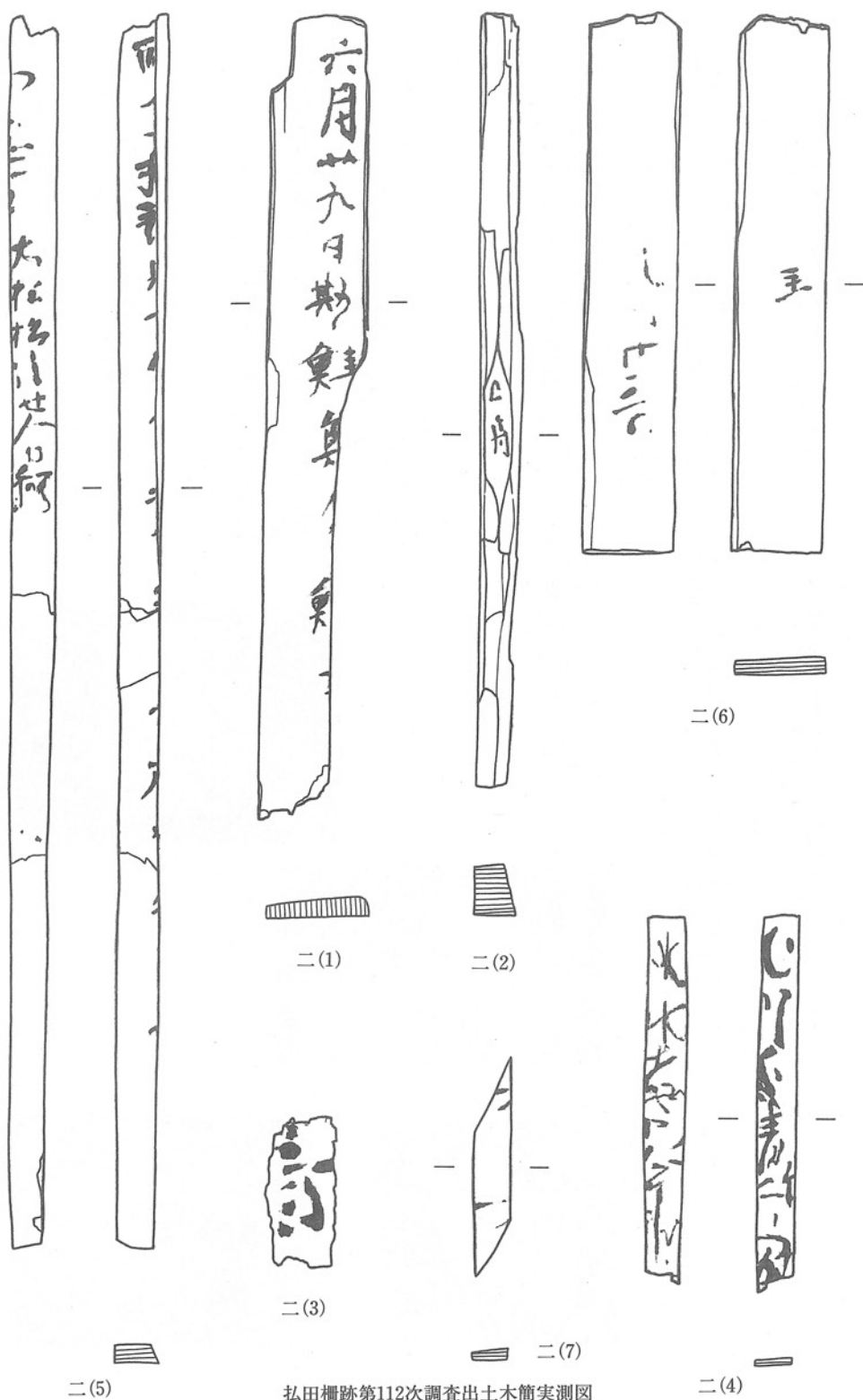
なお、一(1)「東北方八」、二(4)「北門所」、墨書土器「北門」「北預」の「北」の字体は、兵庫県高砂市曾根町塩田遺跡出土の墨書土器「札家」の「札」と酷似している。今回の弘田柵跡の一連の「北」の字体は、李柏文書(中国楼蘭出土。龍谷大学所蔵)に類例があり、塩田遺跡の墨書土器が「札家」ではなく、「北家」である可能性が高いことを示している。

木簡(本誌第十九号)についても、北門造営との関わりを考える必要がある。

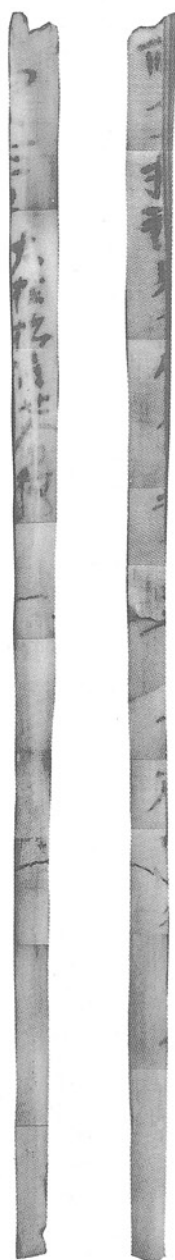
木簡の釈読及び検討は、国立歴史民俗博物館の平川南氏による。

秋田県教育委員会・秋田県教育庁・秋田県跡調査事務所「秋田県跡調査概要」(一九九八年)

(兎玉 準)



私田柵跡第112次調査出土木簡実測図

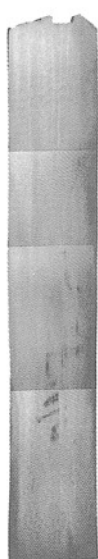


二(5)

(木簡は赤外線テレビ
カメラ画像による)



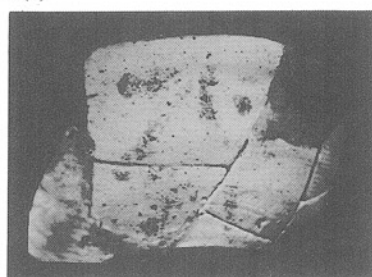
二(1)



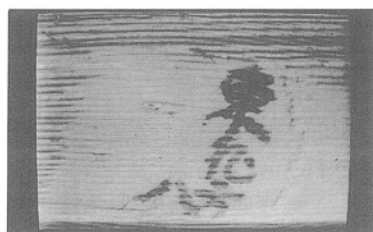
二(6)



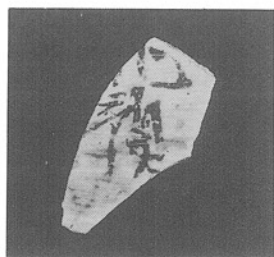
二(4)



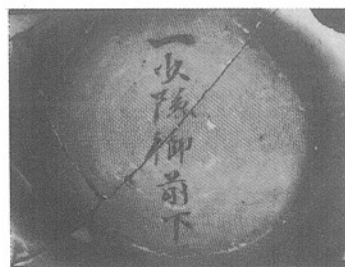
墨書土器「北門」



一(1) (墨書部分)



墨書土器「北預」



墨書土器「一少隊御前下」